

4. 学習方法及び学習成果の評価方法に関する基本的な考え方

(1) 学習方法について

- ・家政学を学ぶための学習方法は多様である。
- ・「家政教育学」「家庭経営学」「食物学」「被服学」「住居学」「児童学」など多くの領域において、①講義形式 ②演習形式 ③実験形式 ④実習形式（教育実習や臨地実習も含む）⑤卒業研究、卒業論文の作成等のさまざまな教育方法を組み合わせて、実践的、総合的学習を習得していることは家政学の基本的素養の観点からも極めて有効と考えられる。
- ・また、これらの学修を通して様々な資格を取得することが可能となる。

(住居学領域)

生活学・社会学的、技術・工学的、文化・芸術的側面など学習すべき分野は広い。しかも前述したように住環境の向上（住居水準の向上）に貢献できる人材を養成するには、基礎的能力と専門的能力を習得できるようにすることが必要である。その方法としては、講義、演習、実験、実習（設計、フィールド調査など）、実態調査 海外研修、研究論文執筆など多様である。

(2) 学習成果の評価方法

- ・家政学の分野が多岐に亘り、家政学の教育の目的も多様であることに鑑みると、学習方法やその評価は一律ではない。しかし、基本的素養を中心とした家政学特有の能力の修得・向上がなされたかという視点は重要である。
- ・各大学がそれぞれ独自のカリキュラムポリシー、ディプロマポリシーに基づく具体的教育目標を設定し、その評価要素を明らかにすることが必要である。

(住居学領域)

デザインの表現力、居住環境の改善・創造に貢献できる力、住宅の設計計画の力、社会とのコミュニケーションをはかれる能力などを評価するにあたって、実験・実習系科目等では個別講評。講義系科目においては、学期の中間に小テスト、小レポートなどを実施、返却し、その成果を学生自身が確認できるようにするなど、内容、方法に対応した適切な評価方法を工夫することが必要である。

(3) 新しい評価方法の試み

食物分野における管理栄養士養成領域において試みられている最近の検討事例を以下に挙げる。

食物分野における管理栄養士養成の教育においては、カリキュラムに教育内容ごと

の目標が示されており、管理栄養士養成施設校である各大学では、それぞれの特色を活かしたカリキュラムの設定を行い、目標の達成に向け、教育に力を注いでいる。

そこで、卒業時の管理栄養士教育の到達度の評価の 1 つの試みとして平成 22～23 年度の厚生労働科学研究「保健・医療の栄養管理サービスの評価に基づく専門的人材育成システム構築に関する研究」において、初めて、管理栄養士としてのコンピテンシー（習得すべき知識・技術能力）に関する指標の開発を行い、管理栄養士養成施設の卒業時点でのコンピテンシーの到達状況の把握を行っている。さらに、コンピテンシーの開発方法やその到達度調査の結果など、この研究成果を全国の管理栄養士養成施設校が共有し、管理栄養士としてのコンピテンシーの指標のあり方と活用の意義を検討していく機会を設けており、今後の新しい学習成果の評価方法の 1 つとして期待される。